



街並みや暮らしの変遷とともに
大きな発展を遂げた昭和の札幌。
その一場面に居合わせた方に、
思い出の旅へと
案内してもらいましょう。

第五回 仲よし子ども館

今回のご案内役は…… 大山ひすいさん(自営業・手稲区在住)

公園に広がる遊びの世界は、
さっぽろっこの心の故郷

私は、時折、心がくたびれてくると、大切な思い出の品を引っ張り出します。それは、三度の引っ越しにも散逸することなく、人生を共に歩んできた緑色の小箱。当時、幼い長男が一生懸命に作ってくれたわが家の宝物入れです。

そこには、昭和五十七年ころ、二人の息子と一緒に通った仲よし子ども館の思い出が詰まっています。粘土で作ったうさぎのペンダントは、大好きな先生からもらった長男の宝物。ひらがなの名札。汽車の刺しゅう入りシヨルダールバック。それらを懐かしく眺めていると、疲れた私の心に子供たちの小さな足音がよみがえってくるのです。

夏。仲よし子ども館の主な会場は、地域の公園です。園内は、風や草の薫りと、子供たちの弾む声に包まれていきます。木陰に敷物を広げて、みんなが仲良く輪になって座ると、アリスさんたちも集まってくるではありませんか。

三歳児を中心とする子供たちは、毎回、時間を忘れて遊びの世界に没頭します。大好きな水遊びでは、持参した着替えさえもずぶぬれにするほどです。私も、元氣いっぱい駆け回る子供たち、いつも笑顔の先生と一緒に泣いたり笑ったり。程なく、楽しい時間は終わりを告げます。遊び道具がマ



西区西町の「梅林公園」での運動会の様子。赤の旗を手にしてしているのが次男・陽耕さん。玉入れでは、お母さんが手づくりした紅白の玉を使いました(昭和59年ころ)

イクロバスに積み込まれると、親子みんなに惜しまれながらも去っていく仲よし子ども館。「ありがとうございました。また、今度」

二人の息子が通った五年間、私自身も、幾分か母親らしく成長させてもらいました。息子たちは、数年前、一人は名古屋へ、一人はアメリカへと

旅立ち、それぞれ自分の道を歩んでいます。

今も、わが家に確かなぬくもりを伝える仲よし子ども館。私その思い出に励まされるように、息子たちもまた、これからの歩みの中で、胸の奥の柔らかな記憶に思いをはせることがあるでしょう。自分たちの「緑色の小箱」を手にしなから。



二人の息子さんの愛用品。うさぎのペンダントは、長男・紀伯さんの宝物

◆仲よし子ども館

昭和三十五年、幼児の集団活動の場として市内六カ所スタート。親子での参加を原則に、夏期は地域の公園、冬期は屋内施設で週一回開催する。

昭和三十年代は、人口の急増や都市化の進行を背景に、幼児教育の必要性が高まる中、市内には幼稚園・保育所が十分に整備されておらず、札幌市独自の幼児教育機関として重要な役割を担った。

以来、三歳児を中心に利用者が増え続け、週二回の開催へ移行。昭和五十年代には百三十四カ所まで増加する。しかし、幼稚園などの整備により、平成八年、三十七年にわたる歴史に幕を閉じた。